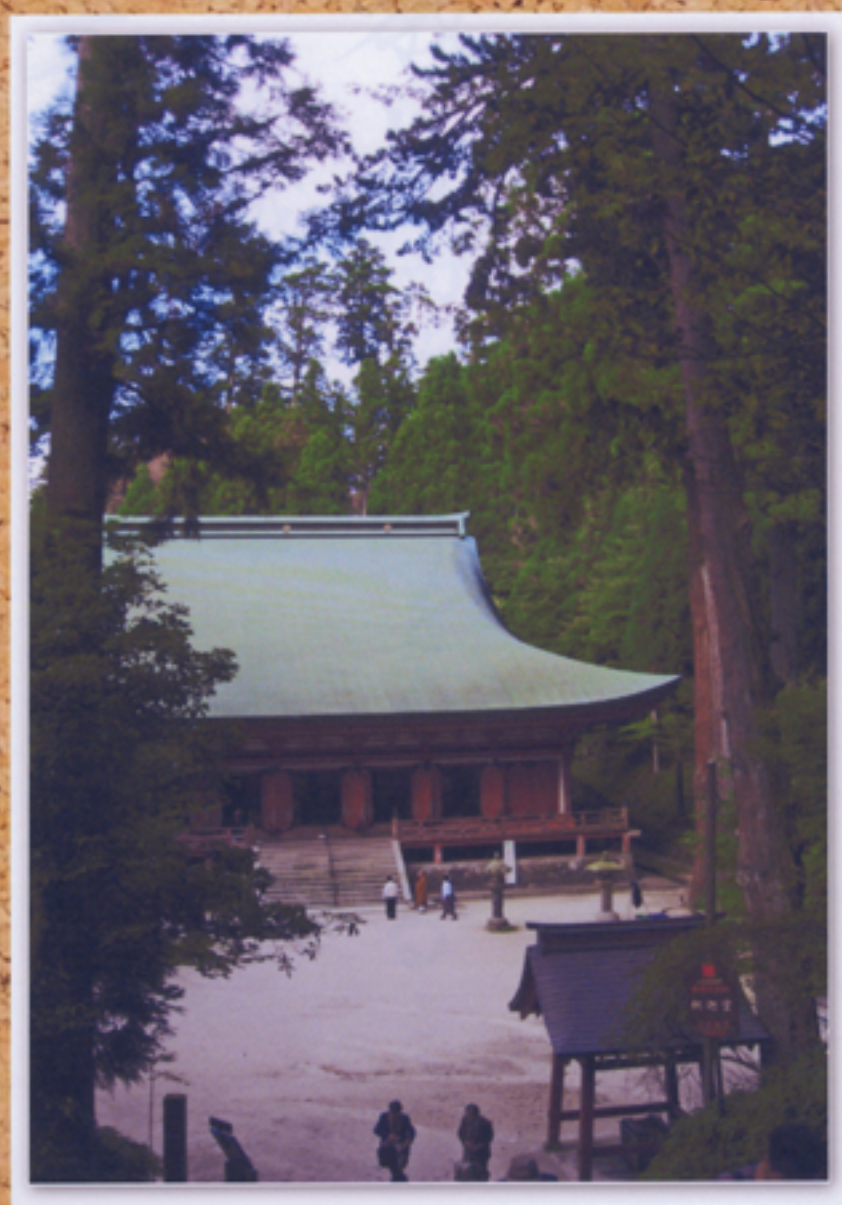


伝道師補任研修

受講記



金剛院檀信徒会 須藤 充

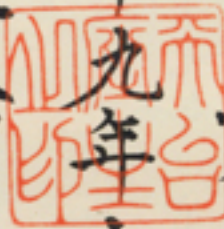


群馬教区

須藤 充

教区傳道師を命ずる

平成十九年十月十七日



天台座主大僧正半田孝淳

天台宗



修了証

須藤 充 様

あなたは平成十九年度第三十二回伝道師補任
祖山研修会を修了したことを証します

平成十九年十月十八日

天台宗群馬教区宗務所長 藤井 祐 順





平成19年度 群馬教区伝道師補任祖山研修会 10月16日～18日

伝道師補任祖山研修会受講記

金剛院檀信徒会 須藤 充

はじめに

菩提寺金剛院住職のご推挙を受けて、比叡山延暦寺で行われる天台宗群馬教区主催の伝道師補任研修会に参加する機会を頂き、一期一会の気持ちで参加を決めた。沼田区からの参加者は私だけだが、30人の参加である。群馬教区宗務所長ら3人の方々の引率世話役を得た。宗務所庶務主任で昭和村遍照寺榎本最紳住職がその1人で、金剛院の縁戚から親近感を覚えた。

この研修を受講するにあたって、金剛院檀信徒会の世話人役を受けて2年程度しか経っていないので、寺院の行事経験や宗教知識の浅い私としてはいささか不安ではあった。しかし折角の機会でもあり、研修の体験を通して祖訓修得がどんなものなのか、その一端を知ることができれば少しはお寺の仕事に役立つかもしれないと考えて研修を受けることとした。

研修期間は平成19年10月16日から18日までであり、メインは中日の17日であった。行程は順調で3日間とも天候に恵まれ、故障者もなく予定通りのスケジュールを消化できたことは幸いであった。

この機会に研修受講記でも起こしてみようと、感じたままの思いを記してみたが、仏教の用語や文字が辞書になくて読みもわからず、そのため文章が遅々として進まず、見聞したことに思い違いも多々あると思うが、自分自身の受講記録として残しておきたいと思っている。

群馬宗務所で結団式

10月16日早朝4時20分に金剛院を出発した。この日、金剛院伊藤亮祐住職が、私たちより早い別のバスで天台宗全国議員会議に出張されることから、私は宗務所まで便乗させていただいた。午前5時30分から宗務所2階会議室で結団式が行われ、藤井祐順宗務所長（伊勢崎市華藏寺）、林行弘教務主任（桐生市最勝寺）、榎本最紳庶務主任（昭和村遍照寺）からそれぞれ挨拶や説明があり午前6時に出発した。

宗務所事務室入り口に、前橋市出身の上原行照阿闍梨の千日回峰行中の写真が掲げてあった。群馬教区としても誇れる偉業の人物である。

車中では、宗務所から日程や資料説明のほか参加者の自己紹介が行われて

研修参加者数は1名欠席で29名となった。バスは関越道から上信越道、長野道、中央道、名神高速を順調に進み養老SAで昼食をとる。再び名神高速に乗り、関ヶ原を過ぎて滋賀県に入る。名所旧跡のガイド説明を聞くうちに京都東ICで東名高速を降りる。一般道からまもなく「田の谷峠ゲート」で比叡山ドライブウェイに入る。登り道を右へ左へと30分ほど進み、西塔大駐車場に到着したのは午後1時50分。駐車場には他の団体バスもあって参拝者たちで賑やかであった。

出迎いの研修道場山本光賢所長らに案内されて砂利道を道場へ向かう。途中、「にない堂」近くを通るとき、山本所長から「いま常行堂で千日回峰行



の行者が修行中なので静粛に」と話された。私たちはすでに修行の戒律の囲みの中に入っているのだと悟った。居士林には午後2時20分に着いた。ほぼ計画時間どおりであった。

居士林での生活が第一歩

私たちが研修道場の居士林（こじりん＝自ら仏教の道を学ぶ道場の意）に到着するや、玄関に入る前から諸々の規律が待っていた。

居士林の担当僧である叡南覚雄師が、居士林での生活の心得として次のような細やかな案内があった。まず、玄関に入る前に履物の土を石畳の上でよく払い、履物棚には先に入った者の順に、かかとを手前にして下段の奥から順序良く揃えて収める。このようなことは、自分たちの普段の生活の中で余り気にしていない部分で、今後役立つしつけど。

部屋割りは、一部屋9人ずつ3部屋と女性2人が一部屋だ。私らの部屋は畳敷きで20畳の大部屋だ。各自の持ち物は壁側に揃えて置き、脱いだ衣服は同じ側の鴨居にハンガーで架け、決してカーテンレールには架けないようにとのことである。

午後2時30分から2階研修室において叡南師から、居士林での生活上の決まりが説明された。



居士林には梵鐘が架けてあり、その鐘の合図で行動すること。研修室では鐘3回で正座（畳のへりに膝をそろえる）すること。研修を受ける者は自ら進んで居士林内の整理整頓、不要電灯の消灯、使用した湯飲みは洗浄してかごに戻し清潔に努める、喫煙は湯所のみとし灰皿はきれいにして火の元に注意する、寝具用布団の上げ下げは各自行う、就寝時以外は部屋の襖は開けておく、起床時の鐘が鳴るまで床から出ないなどである。

特に携帯電話は電源を切り使用禁止の指示があった。これは研修中においては外部との接触を絶ち、研修に専念すべしとの教えであると解した。

午後3時から同所で開講式が行われ、延暦寺側5人の僧の出席の元に、群馬教区林教務主任の司会で進められた。般若心経の額が掛けられた部屋中央の祭壇に灯明が灯され、僧による「法楽」が行われる。続いて群馬教区藤井所長、居士林山本所長の挨拶の後、林主任から列席の僧たちの紹介が行われて開講式を終えた。

このあと叡南師から研修日程とその内容の説明が行われたが、時間刻みのスケジュールに内容の濃さを感じた。

居士林所長の山本光賢師からは、釈迦堂で行う礼拝行止観作法のほか研修中の諸作法の説明があり、特に、釈迦堂、食道、沐浴室では「三黙度」として静寂に勤めることの教示があり、お堂だけでなく食事や入浴などすべてが修行であることを学んだ。

礼拝行座禅止観は無の心

午後4時、鐘の合図で居士林の玄関前に4列に整列する。いよいよ礼拝座禅止観の行に向かうのだ。叡南師の鳴らすお鈴の音に先導され、合掌姿で列を乱さないように砂利道を黙々として歩く。釈迦堂に着くと入堂作法に基づき入堂、山本所長から礼拝止観行の作法の実技が施される。



釈迦堂

○ 積迦堂の大きな板の間では靴下を脱ぎ、座布団2枚を用いて所長の教えに従い座禅を組む。このとき体を数回揺り動かして座を安定させる。不慣れな座禅で持病の腰痛を心配したが意外と苦痛を感じない。言われたとおり呼吸を整え、半眼にして視線を落とす。暗闇の中で蠟燭の灯だけが明るく、耳の奥がジーンと鳴るような静寂の中で、鳥の声だけが聞こえてくる。

○ 意識の中はまったく無の状態のとき、突如、甲高い拍子木の音に体がギクッとする。座禅を組む一人ひとりの背中に僧が答を与える。やや前傾した背中にびしっと答が入ると、不思議なほど心身ともに清々しい思いになる。

○ 座禅を終えるとき、呼吸を整えながら徐々に体を動かし「自己按摩」を施して体や脚の痺れを取る方法が教えられた。この自己按摩は日常生活の中でも疲れたときなどにも使える便利な方法だと思った。

○ 積迦堂を出るときも退堂作法により規律よく行き、往路と同じく叡南師の鳴らすお鈴の後に従い、ご神木に囲まれた夕暮れの砂利道をざくざくと歩き居士林に戻る。

《礼拝止観行で誦経した経文》

懺悔文（さんげもん）「我昔所造諸悪行 皆由無始貪瞋痴 從身口意之所生
一切我今皆懺悔」

三礼（さんらい）「一心頂礼 十方法界 常住三宝」

四弘請願（しぐせいがん）「衆生無辺誓願度 煩惱無尽誓願斷 法門無尽
誓願知 無常菩提誓願証」

般若心経（はんにゃしんぎょう）「觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見
五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 色不異空 空不異色
色即是空 ……(略)」

齋食儀（さいじきぎ=食事作法）

○ 午後6時、鐘の合図で玄関前に整列する。食事は別棟の食道（じきどう=食を受ける道場の意）へ、お鈴を鳴らす叡南師の後に従い4列縦列の合掌姿で歩く。会話は許されない。食道の下足棚には居士林と同じ要領で履物を納める。入室は二列に分かれて広い畳敷きの部屋に入る。食卓の上に整然と並べられた盆のある席に進む。着座する前に床の間に鎮座する伝教大師像に合掌してから食卓に向かって正座する。4列に並ぶ受講生の食卓に対し、4人の僧が研修生に向かって横一列に並び、一つひとつ食事作法に基づき唱念三宝や般若心経などを合掌で誦経する「齋食儀」が厳粛に進められる。

○ 「それ礼の初めは諸々の飲食に始まる」とは、食事の作法や考え方が礼の

初めだという教えである。「齋食儀」では、人が食を得られることの大切さを、あらためて教えてくれる。

食台の上には30センチほどの真四角の盆が置かれ、盆の中には飯鉢、汁椀、采鉢、湯呑が行儀よく並べられてあり、この置き方は変えてはいけない。

食器に盛られている食べ物はすべて野菜料理である。その量は、飯と汁は鉢に7分目くらい、采は野菜の煮物が5片ほど、香采は漬物が2切れなどでちょっと物足りなさを感じる。そのためか食後観(ご馳走様でした)のあとに飯量の増減を希望する者の意向が聞かれ、数人の希望者がいた。

食事中は一切の私語禁止である。咀嚼する音や汁を食する音、箸や食器の音、食器を盆に置く音など一切の物音を立ててはいけない。お菜も器から箸で取らずに、器を手を持って口に運ぶ。

番茶のやかんを手渡しで順送りして静かに湯飲みに注ぎ、最後の者がやかんの注ぎ口を食卓の中心に向けて音を立てずに静かに置く。

食べ終わったあと、湯呑一杯の番茶ですべての器を洗鉢してからその茶をいただく。そのために二切れの小さな漬物は、食器に付着した汚れをこそげ落とす洗鉢のために食わずに残しておかなければならない。以前、箱膳を使っていた農家で、これと似たような食事風景を見たことを思い出した。



伝教大師画像

食事が終わると起立して伝教大師像に合唱してから部屋を出る。厨房前に全員が並び、調理してくれた人たちに「ご馳走様でした」と礼をしてから玄関に進む。厨房でまめまめしく働く人たちの中に、作務衣姿の山本所長の働く姿があった。その人たちが私たちの礼にこやかに応えてくれた。

食器類の後片付け、盆と食卓の布巾がけが食卓列ごとに当番となる。食器は種類ごとにポリバケツに集め盆はきれいに布巾で拭いて、食卓のマークにあわせて揃える。この作業が終わるまで、ほかの人たちは食道の外で待たなくてはならない。

「食前観」「食後観」(後記)には食物のもたらす縁に感謝し恩に報いることの大切さが表されている。日常生活の中で食することへの感謝の思いを意識しなければいけないと思った。

《齋食儀で誦経した経文》

呪願（しゅがん）「十方施主 罪障消除 福寿増長」
唱念三宝（しょうねんさんぼう）「南無清浄法身毘盧遮那仏・・・（略）」
般若心経（はんにやしんぎょう）（前出）
展鉢偈（てんぱつげ）「若展鉢時 当願衆生 心身寂静 離諸麤暴」
受食偈（じゅじきげ）「若得食時 当願衆生 為法供養 志存仏道」
供養偈（くようげ）「此食色香味 上献十方仏 中奉諸賢聖・・・（略）」
誓願（せいがん）「一切の悪を断ぜんが為に 一切の善を修せんが為に
一切の生を度せんが為に 仏道に回向せんが為に」

略食事作法（非食＝夕食時に用いる）

食前観「われ今幸いに、仏祖の加護と衆生の恩恵によって、この清き食を受く、謹んで食の由来をたずねて、味の濃淡を問わず、その功德を念じて品の多少をえらばじ、いただきます」

食後観「われ今この清き食を終わりにて、心豊かに力身に満ち、願わくばこの心身を捧げて己が業にいそしみ、誓って四恩に報い奉らん、ごちそうさまでした」

沐浴・放心で一日の終わり

食道を出るとき、豆炭行火が一人ひとりに手渡された。すでに熱いくらいになっていた。30年位前までは私たちの冬の暮らしの必需品であった豆炭行火が、今も現役として使われていることに驚いた。この豆炭行火が居士林で掛け敷き2枚だけの布団の寝床には大変ありがたかった。

午後7時から1時間ほど、山本所長から「比叡山について」夜間の講話が

行われた。この山本所長のこやかでユウモアのあつ話しぶりに、テレビのない食後のひと時を楽しく過ごすことができた。

この後の入浴は、叡南僧の号令で人数ごとに15分で区切られ、しかも多人数を短時間で入浴させるため、その前後5分に前後のグループが食い込ませ



る合理的な方法は、脱衣と着衣が早くできれば入浴時間が少し延びる。入浴は癒しではなく体を清めることに意義があると解した。そして短時間でも入浴できて疲れが取れた思いだった。風呂場には「沐浴室」とあった。

夜9時、鐘の合図での消灯・放心（就寝）。老齡期の男達が修学旅行の学童のように大部屋で枕を並べて寝る姿は可笑しくもあり切なくもあった。

居士林に入りわずか半日の中で、お茶も飲まずトイレに行くのが精一杯であったが、日常生活の中で何気なく過ごしてしまっている「時間の大切さ」を実感した。とは言うものの、生活にはゆとりも不可欠だと思うが。

居士林が「仏教の道を学ぶ道場」という場所であることから、ラジオ、テレビ、電話もないが、ランプや蠟燭でなく電気があるだけでもありがたく思った。携帯電話も使用禁止などの俗世からの遮断は当然と思う。居士林の湯所以外では喫煙できない愛煙家は大変だったと思う。

小食（朝食）前の礼拝止観行

2日目の朝5時、鐘の音で覚心（起床）となる。これより1時間前は目覚めていても寝床から出ないことという教えだったが、4時ごろから襖の開け閉めと板張りの廊下を軋ませて歩く音がする。私を含めて老齡者のトイレは止むを得まいと思うのだが、居士林での決まりは守りたいものだ。

寝床を二つ折りしてすばやく着替えと洗面を済ませ、まだ薄暗い早朝5時15分、肌寒い外気を感じる表に出る。玄関前に整列して叡南師に導かれて釈迦堂に向かう道は薄暗くて足元が覚束ない。

昨日習った座禅止観作法により座禅に入る。早朝の暗く冷たいお堂の中で蠟燭の明かりがことのほか暖かく見える。前日より座禅の時間が長い。凜とした静寂の中に、鳥の鳴き声や啄木鳥が木をうがつ音が、不思議なくらい耳に入ってくる。入堂の時にはぼんやりしていたお堂の高窓が明るくなり、やがて朝のお勤めが終わる。

釈迦堂を出て澄んだ朝の空気を胸いっぱい吸い込む。座禅止観行で心身ともにすっきりしたのか、とても気分が爽やかである。山本所長に従い「浄土院」参拝に向かう。教えられた「差手」を組んで歩く。この差手で歩くことが、呼吸を整え姿勢が良くなることに気がついた。

千日回峰行の僧がいる常行堂の脇を通る。その僧は30才台というが、いったいどんな気持ちであろうか。無事に修行を終えることを祈りたい。

ご神木の狭間の砂利道を歩く足音だけがざくざくと聞こえる。早朝の冷たい空気が頬に気持ちよく感じる。

伝教大師の御廟所を早朝参拝

御廟所に向かう道の傍らには、天台宗開宗1200年を記念して立てられた石灯籠が延々と連なる。道行きの中頃であったろうか、群馬教区の銘が刻まれた石灯籠を見て、郷土群馬天台宗のがんばりを感じた。

やがて浄土院に着く。伝教大師の御廟所である「浄土院」は、比叡山で最も清浄な聖域とされている。弘仁13年(822年)に入寂された伝教大師がこの地に埋葬されている。境内を進みお堂に合掌する。お堂の脇を抜けて御廟所(右の写真)の門前に並び、般若心経をうやうやしく誦経する。



境内前庭に戻ったとき、山本所長がにこやかに声をかけた方向に、一人の僧が箒を手に境内の落ち葉を掃き清めていた。御廟所を守る僧は「侍真僧」(じじんそう)といわれ、御廟所に入出りできる僧は比叡山でただ一人という。伝教大師は今も生きている「生身の大師」で、毎日御廟から拝殿に通いご真影に入るといわれる。

侍真僧は12年もの歳月を、一切の俗世との円を断ち切ってこの場所に籠り、大師にお仕えして行に励む隔世の行である。未明から深夜まで行に勤めて開祖に2度の献膳をするほか、毎日庭掃除を欠かすことができないことから比叡山の三大行のひとつ「掃除地獄」と言われる。

居士林の清掃で汗

居士林に戻ると叡南師が待ち受けていた。朝の掃除である。各部屋の布団上げをしてから、名簿順に玄関、部屋、廊下、便所、風呂場、洗面所、湯所の掃除が割り当てられて30分内に済ませる。

私は他の一人と玄関掃除を担当。下足棚から履物全部を玄関前に出し、棚の砂を掃き出してから土間を掃き出す。雑巾がけはガラス戸から、靴脱ぎ、下足棚など二人で汗をかいて精を出す。

大バケツに用意されていた水は、驚いたことに風呂の残り湯と思われ、叡南僧の人の思いやる優しさを感じた。そして、たとえ風呂の残り湯でも無駄にしない心がけは、私たちの日常生活の中でこそ活かさなければならないこ

とだと反省した。玄関脇の道具置き場に掃除用具を収めて掃除を終了する。朝のお勤めは気持ち良かった。と同時に急に空腹を感じた。

小食（朝食）は粥

午前8時、小食（朝食のこと）のため食道に向かう。作法は昨日の夕食時と同様である。ただ、小食（朝食）は粥のため誦経に「粥偈」が入る。盆に置かれている器には、7分粥、味噌汁、香采、青菜のおひたしである。この粥を音も立てずに食べるには、神経を使う。昨夜も今朝も、汁物を音を立ててすすめる人がいて指導僧から注意を受ける場面があった。

食する前に「生飯（さば）」を取る作法で、盆の左側にある小皿に粥7粒を取り「出生偈」を誦経する。食後、食卓ごとに集めて窓の外にある皿に盛って供え自然に感謝する行という。ともあれ正直のところ、この粥っ腹で昼食まで腹がもつのか、いささか気になるころであった。

居士林に戻って次の教科まで小休止となるが、常備薬を服用したり、トイレ、歯磨きなどで腰を下ろしている間がない。大きな灰皿を囲んだ喫煙者たちで湯所にはもうもうと紫煙が渦巻いていた。

《齋食儀で新たに誦経した経文》

出生偈「汝等鬼神衆 我今施汝供 七粒遍十方 一切鬼神供」
正食偈「若飯（粥）食時 当願衆生 禅悦為食 法喜充滿」
粥偈（朝食の粥座のみに用う）「持戒清浄人所奉 恭敬隨時以粥施 十利饒益
於行者 色力寿楽詞清弁 宿食風除飢渴消 是名為藥仏所説 欲得人
天長寿楽 応当以粥施衆僧」

写経は神経集中の行

午前9時から2階研修室で写経の実習である。朝食後の雑用も終わったので2階へ上がって数人と雑談などをしているところへ叡南僧が来て準備を始めたので、皆で手分けして座卓、座布団、写経手本、半紙など写経用具を並べることになる。

全員着座後、叡南僧の指図で



墨を磨る作業から始まる。写経は初めてという人が半数以上いた。

私は自宅でいささか写経の試みもあったけれど、ここでは手本の字が小さ目なのと文字も多少違うものがあるため、手本の文字を確かめながら書き進めた。一心に筆を進めて45分で書き上げることができた。隣席の人から「ずいぶん早いですね」といわれて、わずかな経験の効果を感じた。

10時には全員筆を置き、書きあがらない人は家に帰ってから完成させることで、作品は各自持ち帰ってよいことになった。写経の実習を終えて、全員で用具類の後片付けをして散会となる。

お授戒の話

午後から行われるお授戒にあたり、11時から説戒師・中山玄晋師からお授戒について話がされた。太り気味の体格の良い僧で、歳は71歳というから私と同年齢である。中山師は、糖尿病で京都の病院に入院をした話から始まり、私らに耳を傾けさせていった。坊さんも病気になる人間だと思った。

「儒教」の「君子の三楽」すなわち「①家庭のためにできる楽しさ ②人のためにできる楽しさ ③全うな教育をできる楽しさ」をあげて、中でも「家庭の幸せが先ず第一である」と説いた。

さらに中山師は伝教大師が桓武天皇に奏上した文中の「一目の羅は鳥を得ること能わず」をあげ、これは「仏教も網の目のひとつであり、悟りを得るのに必要である」という意味で、仏教の教えの大切さを説いたものであると話された。

研修最後の齋食儀

正食（昼食のこと）の齋食儀では、食道での食事が終わりになると思うと何か寂しい気持ちになる。器に盛られたご飯は野菜の炊き込み飯で、朝食の粥で、空きっ腹の私たちにはご馳走だった。これには「研修最後の食道からのご馳走ですよ」というお寺の気持ちが感じられた。そのためか「誓願」の「いただきます」と「食訖偈」の「ごちそうさまでした」を言う皆の声が大きかったような気がする。厨房の皆さん、お世話になりました。

研修終了証の授与代表に

正食を終えて居士林に戻り、運動着から背広に着替えるなど、居士林を出るために荷物をまとめる。午後1時から2階広間で閉講式が行われる。

開講式と同様に座布団を並べて祭壇に向かって座す。群馬教区所長らは右前方に、比叡山の僧は左前方に、それぞれ法衣を着て並ぶと私たちも姿勢がしゃんとしてくる。

式の進行は林教務主任があたり、群馬教区藤井所長、延暦寺居士林山本所長から、それぞれ挨拶がある。次に群馬教区藤井所長から研修終了証授与が行われ、研修生代表に私が選ばれたことは大変な榮譽でありがたい思いであった。



終了賞を受ける私

続いて延暦寺からの伝道師任命

辞令伝達が山本所長から、私とは別の代表に授与された。そのほかの研修生には延暦寺会館で授与されることになる。

伝道師としてのお授戒

今回研修を受けて伝道師の辞令をいただいたが、これからがお授戒の重要な場面を迎えることになる。それぞれ荷物を背負い居士林に別れを告げる。釈迦堂に向かってざくざくと砂利道を歩く。荷物をまとめて堂の外に置いて向かって左の扉から入る。



平成19年度 群馬教区伝道師補任祖山研修会 10月16日～18日

釈迦堂に入ると中央に祭壇が準備されており、祭壇に向って中央より左の位置に座す。担当の僧から儀式の進め方の説明がある。そして高僧らのご入堂を待つ。本日お授戒くださる森川伝戒大僧正が、法衣をまとった数人の僧達とともに静かにご入堂になる。僧達によりお授戒の儀式が始められる。

進行役の僧にならって研修生も誦経する。経文は10種あり事前に誦経のやり方の説明がされたが、研修で初めての経文が半数もあった。

お堂には一般の参拝者が後を絶たずに出入りしていたが、私たちの受けている儀式を興味深そうな面持ちでうかがっていた。

お授戒の儀式が粛々と進められた。大僧正から研修生一人ひとりに得度の儀が行われた。伝道師の輪袈裟を首に掛けて、大僧正の前に頭を垂れたときの私はまさに感無量、身の引き締まる思いであった。

儀式終了後、釈迦堂前の石段に並び記念撮影となる。森川大僧正、山本研修所長、藤井群馬教区所長はじめ関係各僧と一緒に記念撮影に、今回受講した伝道師補任研修がとても意義深いものであると改めて実感した。

諸堂参拝して延暦寺会館へ

研修生は前日来た道を駐車場まで戻る。その途中の石段道で、山本光賢研修所長にお願いして、釈迦堂を背景に私と一緒に写真を撮らせていただいた。すばらしい記念である。(右の写真)

見送りいただいた僧に別れをつけてバスが動く。「大講堂」を見学する。立派な建物で学問研修の道場として位置づけられている。同じ境内に大きな「開運平和の鐘」を掛けた鐘楼がある。参拝者が自由に突くことができ、その響きは深く包み込むような音色である。



時間の都合で阿弥陀堂参拝までは残念ながら足伸ばすことができなかった。やがて延暦寺会館へバスで移動、4時30分入館となる。この延暦寺会館には、今春4月に天台宗沼田部で天台宗開宗1200年慶讃参詣の折に宿泊したが、今日の部屋割りがそのときと同じ305号室なので懐かしさを覚える。

同室者は、多野部・醫光寺の品川久氏、北群馬部・遍照寺の山口栄一氏と私の3人である。琵琶湖を遠望できる部屋に入るとほっとするが、夜の部が終わる8時過ぎまでは浴衣に着替えられない。

酒井雄哉行者の千日回峰行

午後5時から研修室でのビデオ鑑賞は、酒井雄哉大阿闍梨の「千日回峰行」のドキュメンタリーで、昭和53年10月にNHKが制作したものである。酒井師は大正15年生まれ、40歳のとき妻の自殺によりすべてを捨てて出家得度。飯室谷長寿院で籠山行の後、昭和50年4月7日、千日回峰行に向かって飯室谷不動堂を出峰した。

通常では千日回峰行には無理な年齢で認められなかったが、師僧の推薦と本人の強い意志により入行を決意したという。

奇しくもこの日は箱崎老師の誕生日であり、酒井行者の亡妻の17回忌の命日でもあった。

長寿院では一人で起居し、掃除、洗濯、炊事など身の回りすべて一人でまかなうため、睡眠時間は一日4時間程度。食事はうどん、豆腐、ジャガイモなどの1日2回の菜食で、後の「堂入り」に向けた体をつくるという。

回峰行は「行不退」の捨て身の行である。そのため「浄衣」という白装束(死装束)を着て、挫折したときは自ら命を絶つ覚悟で行うとされている。午前1時から8時まで40キロの山中を走り、300箇所を礼拝し真言を



深夜、飯室回峰の難所を跋涉する酒井行者



内海俊照行者の堂入りの儀

唱える。風雨降雪などの天候に関係なく、たとえ熱が出ようと怪我をしようと1日たりとも休むことは許されないという。回峰行の1~3年目は100日、4、5年目は200日を歩き、5年間で700日の行道礼拝を満行して明王堂に「堂入り」となる。

堂入りの前に、明王堂法曼院で一山の住職、法縁の僧侶と今生の別れの宴である「齋食の儀」が行われる。回峰行の山場である「堂入り」は不動明王と一体となる生き葬式といわれ、9日間の断食、断水、不眠、不臥は医学的には死を意味する。1日3度の勤行で延べ十万遍の不動真言を唱え続ける。

1日1回午前2時に不動明王にお供えするため井戸の水を汲む「取水の儀」のときだけだが、堂を出て外気に触れることができる。

日が進むにつれ「取水」も覚束なくなる中、信者の見送りに励まされ、付き添いの僧たちに助けられながら、ただひたすらに辛く厳しい行を勤める。



内海行者の取水の儀

過酷な堂入りを満行すると「出堂の儀」を迎え、「法の湯」を口に受けて「当行満」となる。出堂後、体調を回復した酒井師は、昭和54年3月大雪の降る日、千日達成を目指して行道礼拝に向かった。

ビデオにはなかったが、ついに昭和55年10月13日に千日回峰を満行して「阿闍梨」となる。「阿闍梨」とは弟子を指導する高僧を指し、千日回峰行を満行した僧に与えられる尊称である。



内海行者の堂入り満行

酒井阿闍梨は、回峰行400年の史上46人目、昭和に入って以降10人目の千日回峰行者である。さらに、酒井行者は飯室谷回峰を391年ぶりに満行したという特筆すべき記録を樹立したのである。

飯室谷回峰は、回峰行主流の無堂寺谷回峰より10キロ長い40キロあり天正18年以降千日回峰行が修されていない。酒井行者は箱崎文応老師の悲願である横川の飯室回峰をとったのである。

この間に履きつぶした草鞋は、酒井代阿闍梨の場合では870足を超え

ていたという。

さらに酒井阿闍梨は、千日回峰を満行した僅か5ヵ月後の昭和56年3月28日、2度目の千日回峰に入行。昭和62年7月5日、ついに奇跡とも言われる大偉業・二千日回峰を満行したのである。この二千日回峰を満行した行者は千日回峰行400年の史上でわずか3人しかいない、その1人が酒井大阿闍梨なのである。

そして平成2年3月、12年籠山行を満行。その後も大師の信条である「行は無始無終」を実践、80歳を超える高齢にもかかわらずかくしゃくとした姿で、比叡山の公式行事に大阿闍梨のお勤めされているという。現在、飯室谷長寿院住職をされている。

天台宗と千日回峰行

回峰行とは、比叡山の谷や峰を巡って礼拝する行のことを言う。比叡山は古来から神の山として尊ばれ、伝教大師が入山してから神仏の山とされてきた。「山川草木悉有仏性」(さんせんそうもくしつうぶっしょう)の思想から一木一草のすべてが仏と尊ばれる霊山であり、この山を巡礼することはそのまま仏界に通じると言われている。

この回峰行は建立大師相応が成仏を期し、比叡山山中を跋涉して国家の安泰を祈願した捨身の修行が始まりとされる。ひとたび入行すると途中でやめることは許されず「行不退」の行で「回峰地獄」といわれる。

跋涉は無堂寺谷回峰で1日30km、礼拝箇所は300箇所、その全行程は地球1周分の3万数千キロに及ぶ。3年目までは、毎年100日、4年目と5年目は1年で200日連続して行う。



上原行者の山中礼拝行

出峰から75日目に年1日だけ人々のために祈る「京都切り回り」の行で下山が許され、阿闍梨先達で京都市内80キロを巡拝して歩く。

700日を満した行者は最大の難関「明王堂参籠（堂入り）」となり9日間を断食、断水、不眠、不臥で念誦修法に専念する。堂入りを満行すると「当行満」となる。6年目60キロコースで8百日目の赤山苦行が終わると、7年目は「京都大廻り」となる。



上原行照行者の堂入り

道程84キロを100

日間、多くの僧たちと京都の街を歩き、沿道に待つ一人ひとりに数珠を手向けて仏の加護を祈る「お加持」で、1200年変わらぬ比叡山と京の人々のつながりを深める。「京都大廻り」は、午前1時半に無動寺を出て行者道を歩き、清水寺や北野天満宮など20箇所を巡拝する。

この「京都大廻り」に金剛院副住職の亮朝師がお供として歩かれていることを知り、大変なご苦勞をされたのだとあらためて敬意を抱いた。



京都大廻りで行者橋を渡る上原行照行者・右端は金剛院亮朝師

この千日回峰行を満行した行者は、天正13年（1585年）以降の記録で49名しかおらず、戦後では12人という。この中に平成4年に満行した

前橋市出身の上原行照大阿闍梨がいることを忘れてはならない。

なお現在、星野圓道行者が平成15年3月、この千日回峰行に入行してすでに堂入りを満行、平成21年には千日を満行する見込みであるという。この星野行者が満行すれば、天正年間以後50人目、戦後13人目になる。

琵琶湖の夜景は不夜城

ビデオ鑑賞の後、楽しみにしていた夕食となる。先ほどと違う会議室のテーブルの上には大きな箱弁が並べられている。ビールもところどころに置かれているところを見ると、今夜はアルコールが解禁らしい。

乾杯の後、箱弁のふたを開けるとすべてが精進料理だが、居士林と違って野菜だけでなく見るからに美味しそうだ。ビールのほか日本酒も出されたので、それをいただく。箸の運びがよくてご飯のお代わりをする。

夕食後およそ1時間、会議室で参加者同士の座談会となる。7～8人のグループで、今回の研修を中心とした各自の感想や意見を出し合った。参加については、寺側の意向や費用の拠出にばらつきがあった。参加者は良い体験をしたということが一様な感想であった。

午後8時、ようやく自由時間となる。フロントにある売店で、「鉄刀木」という硬い木でできた逸品の念珠を買う。伊藤住職から、天台宗では数珠を手首に二巻きするのが慣わしだと教えられていたので、今回の登山で買うことにしていた。着替えなどの不要物を売店で宅配便にする。

宿舎の浴室は一流ホテル並みの大浴場であり、風呂から見る琵琶湖対岸の景色はまさに絶景である。

部屋に戻ってからも、琵琶湖を挟んだ近江盆地の夜景を飽きることなく眺め、その煌々と明るく輝きは不夜城を思わせる観があった。



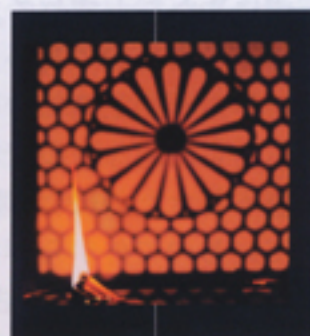
根本中堂での礼拝止観行

最終3日目、朝5時10分のモーニングコール以前に支度を整える。経本、

輪袈裟、数珠をポケットに、会館玄関前に集合、根本中堂に向かう。木々に囲まれた早朝の空気は清々しく体の中まで気持ちよく伝わってくる。

早朝の根本中堂の中は、ひんやりとして足が冷たい。根本中堂の宮殿は私たちの座する所より人2人分ほど低い位置にある。

その宮殿には伝教大師が彫ったといわれる秘像薬師如来が祀られているという。3個の灯籠には伝教大師が火を灯して以来1200年の時を超えて「不滅の法灯」が輝き続けている。(右の写真)



私たちしかいない静けさの中、座禅止観が始まる。1時間有余の朝事(朝のお勤め)を終える。朝事では「幸せ」は家庭から始まり、国家の安泰、世界平和を祈願するのが伝教大師の教えであると、朝事を指導された武円超僧からお話がされた。私たち凡人の感じるところは、大師の思想は純粹ではあるが、しかし遠大な思想であると解した。



根本中堂

近江最古級の古刹「百済寺」参拝

朝事を終えて会館に戻る。展望の良い食堂で作法なしの朝食をいただく。居士林での研修が懐かしく感じてならない。そんな思いを抱きながら午前9時に延暦寺会館を後にして帰路に着く。バスは比叡山を下り名神高速に乗る。八日市ICを降りて琵琶湖東岸の田園地域をバスは走る。予定時間より早く、10時20分に天台の寺院・百済寺駐車場につく。



小春日和の好天に恵まれて上着を脱いで、まぶしいほどの陽の光を浴びて歩く。どっしりとした本坊のある広い境内を抜け、表参道を本堂へと石段を登る。この石段は、段の奥行きが深くて歩幅に合わないため、リズムが取れずにやたらと疲れる。おまけにこの登りの石段の長いこと。

やっと仁王門に着くと、そこからさらに急な石段で本堂に。折角登ってきたのに、本堂は閉ざされているので外から拝礼する。

この百済寺は、推古天皇の御代に聖徳太子の御願により百済(くだら=朝鮮古代三国の一つ)の人たちのために創建された古刹だ。



喜見院の庭園は「天下遠望の名園」といわれ、池泉回遊式で山上眺望の見事なパノラマ庭園である。

駐車場に戻ると、売店のおばちゃんが元気な声で売り込みに懸命だった。この日の団体客は私たちだけだ。暑いくらいの天気の中を歩いてきたので、自動販売機のアイスクリームが良く売れていた。

敢えて言うなら、付録的な百済寺の参拝は不要と思った。理由は、私らは比叡山に研修登山したとはいえ、東塔地域と西塔地域の一部のしか参拝しておらず、法華時総持院や無道寺明王堂をはじめ、横川地域には一步も足を運んでいない。折角、時間と経費を費やして来て、これらを参拝しないで伝道師研修を終えるのはとても残念だった。今後の伝道師研修では「比叡山延暦寺全山参拝」をぜひとも組み込むべきで、全山を見聞することで天台宗伝道師としての意識も高まるのではないかと考える。

帰路につく

百済寺住職の見送りをいただき、予定時間より30分も早い11時10分寺を後にする。琵琶湖周辺は名所旧跡が多いので、バスガイドさんも案内に忙しい。彦根ICから名神高速に乗る。これから先は来た道と同じだ。

来たときと同じく養老SAで昼食をとる。自分の好みの食事ができるので、とてもいい企画だ。長野道から上信越道に入ると、ふるさとに近くなったと感じる。横川SAの休憩で少しばかり早いラーメンをすする。歳のせいかな近頃はどこに出かけても外食には汁物の麺類がいい。藤岡PAで西毛の人たちが降りる。予定時間より早く宗務所についたが、金剛院伊藤住職の出迎

えをいただき、車中あれこれと話をしているうちに沼田に着いた。

あとがき

今回受講させていただいた伝道師補任研修は、今までにない初めての体験から、見たり聞いたりした仏教の字句、熟語、読み方などに戸惑うばかりで、文章を書き進める上で大変難儀をした。経文の名前がわからず伊藤住職に尋ねたり、副住職から図書を借用したりして補足できたので助かった。

そして何だかんだと言いながら、あれもこれも未消化のまま、書き終えるのに日数ばかりかかってしまった。

比叡山への登山は今回で2度目、前は天台宗開宗1200年慶讃の登山だが、今回の登山ではその目的からして全く違う感覚で臨んだ。仏教の教義とか戒律とかの難しいことはさておいて、平素あまり知りえない仏教の世界を覗けたことは、私にとって大変貴重な経験となった。

今の自分が比叡山にいることそのもの総てが修行であり、その現場にいるのだという緊張も体感できた。



特に、酒井雄哉行者の千日回峰行記録映画には息が詰まる思いで見入り、強い驚きと感動を覚えた。まさに人間のなせる業を超越した、決して誰にでも出来得るものではない厳しい荒行が、現実にも行われているそのこと自体に只々驚嘆せざるを得ない思いであった。

しかも、この超人的な荒行を2回も満行してなお、現在も大阿闍梨としてまた住職としてお勤めを果たされているという。私は、酒井師がいったいどんな思いでこの行に臨み、どんな思いで僧としてのお勤めをしているのか、機会があれば知りたいと思った。

そんな気持ちでいたためか、テレビで酒井師の対談が放映されてそれらを知ることができた。さらに副住職からお借りした図書「大阿闍梨酒井雄哉の世界」の中に、第253世天台座主山田恵諦師の言葉があった。

「行者の修行はみ仏と対面し、対話し、み仏の境地に達しようとするものである。それ故に、人には大変厳しい苦行と映るかもしれないが、行者には案外『楽行』であるはずである。『おのずから住めば持戒のこの山は、実なるかな依身より依所』(伝教大師の詩)。比叡山という素晴らしい環境でみ仏と一体となる行をさせてもらえることは、まことにありがたいと行者連は喜んでい。酒井阿闍梨は、二千日を満行しても、自分なりの行で無始無終の行に徹するであろう。」と記している。

酒井阿闍梨は「本当に環境というものは大事や。いい先生に恵まれ、いい環境に住まわせてもらう。ほんとにありがたいことや。」と座主と同じことを言っている。さらに「小林先生は坊さんの先生、小寺先生は学問の先生、箱崎老師は回峰行の先生で、この三人の先生がいなかったら今日の自分はない」と断言している。(註) 入門時の小林隆彰師、叡山学院時の小寺文穎師、飯室谷長寺院時の箱崎文応老師の3人をさしている。

そして「回峰中に辛いことはないと言えようそになる。その辛いのをグッと我慢する。そうすると、いつか辛い壁を突き抜けて、楽しみを見つけることができるんだ。」と究極の真理を語っている。

酒井師を映像で見ると、ふくよかで温和な好々爺に見える。あれほどの苦行を重ねているにもかかわらず血色が良く、痩せているわけではない。しかし食事は1日2回、それも極めて粗食だというから驚きである。

平成19年4月、比叡山に登山した折に上原大阿闍梨のお話を直接聞く機会があったが、上原師も血色の良い顔色であった。今日の私たちが美食飽満に甘んじている食生活は、決して健康的ではないのかも知れない。

『我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋癡 從身口意之所生 一切我今皆懺悔』

現代語訳では「自ら認識するとしないにかかわらず、たどりきれない過去からの罪過を、今全身全霊で悔い改めて心身を清浄にします」という。

仏道の世界から見れば、私たち凡人の住む世の中は悪行三昧、汚れきっているといえるのかもしれない。「懺悔文」のとおり全てが懺悔である。

最後に、今回伝道師補任研修を受ける機会を与えて頂いた金剛院住職伊藤亮祐大僧正に深く感謝申し上げたい。そして私は、菩提寺に些かでもお手伝いできることが、先祖の供養に繋がるのではないかと考えている。

平成20年4月吉日

須藤 充



世の中に山てふ山は多かれど
山とは比叡のみ山をぞいふ

慈円

